懐かしい校舎

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
懐かしい校舎

【Ｎコード】
Ｎ５４１８Ｎ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
高校の校舎。何年も前に卒業した卒業生達がそこを見回って感じることは。少し変わった学園ものです。

第一章

懐かしい校舎

「御前変わったなあ」
「御前こそな」
学校で再会してだ。皆それぞれ言うのだった。
「奇麗になったじゃない」
「そうかしら」
「髪の毛薄くなったんじゃないのか？」
「前と変わらないよ」
いい変わり方もあればそうではないものもあった。それはまさにそれぞれであった。
「まあ何だよな。三十にもなったらな」
「やっぱり皆変わるよな」
「そうよね、それはね」
「本当だよな」
今彼等は校門のところにいた。瓦のかなり独特な建物が目の前にある。そしてその入り口では紫やピンクや黄色の小さな花々が咲き誇っている。
「いつも花があったけれど」
「今も変わりないよな」
「そうよね」
その花を見ても言うのであった。
「この花、高校の時はあまり意識しなかったけれど」
「普通に見てたよね」
「けれど今はね」
「違うよね」
皆笑顔で話しながら学校の中に入る。まずは校舎の中に入る。
「土足で入られるのがいいんだよな」

「下駄箱ない学校って高校じゃ珍しいし」
「そうそう、それが楽でね」
そんな話をしながら先に進む。廊下には誰もいない。黒い廊下の床に白い壁が対象的だ。校舎はかなり古い雰囲気でそこには歴史が感じられる。
「ここ、よく歩いたよな」
「っていうか毎日だっただろ」
「登校したらすぐに入ってね」
「毎日ここから教室に入って」
「それで教室まで入ってね」
皆左の門を曲がった。右側に教室が続く。ガラスと鉄の扉が見える。左手は窓になっていてそこから光が差し込みそこから小さな中庭が見えている。
「そうそう、ここでよくたべったよ」
「皆で壁にもたれかかって話とかしたよな」
「だよね」
そんな話もした。そして右手に降りる階段も見ながら先に進んでだ。ある教室に入った。
そこには机が並んでいる。当然教壇もある。そこに入ってまた言うのであった。
「本当に変わらないな」
「だよなあ、っていうかあの時のまま？」
「全然変わらないし」
皆また話す。
「こうして久し振りに集まって来たら本当に全然変わらないし」
「ある意味凄いっていうかな」
「懐かしくもあるし」
「嬉しいっていうのかしら」
「やっぱりね」
「こういうのって」

「まあとにかくな」
そんな話をしながらだ。教室にそれぞれ座る。そうして話をする。
「先生呼んだ？」
「一応ね」
女性陣の間で話をする。
「呼んだけれど」
「来るかな」
「どうかしら」
その辺りはかなり曖昧かるあやふやなものだった。しかしそれでも彼女達はそれぞれの席に座ってだ。そのうえであれこれ話をはじめた。
そしてだ。さらにこんなことを話すのだった。
「それにしても今日集めたの誰だった？」
「ああ、俺」
一人のオールバックの背の高い男が言った。
「俺が考えたんだ」
「あれ、脇坂だったのか」
「御前だったのかよ」
「たまにはこういうのもどうかなって考えたんだよ」
だからだというのだ。

第二章

「それで皆に連絡してみたら結構集まったな」
「まあな。暇だったしな」
「俺もな」
「私もそうだったし」
皆それぞれ言う。
「それに懐かしのキャンバスに皆で集まるのもな」
「いい感じよな」
「それもそうよね」
「だよな」
そんな話をしているとだった。ここでだ。
「あれ、結構いるな」
「あっ、先生」
「来てくれたんですか」
薄い紺のスーツとブラウンのネクタイで髪が少し赤い初老の人が部屋に入って来た。顔は若々しいが髪の毛は薄い。その人だった。
「あっ、先生お久し振りです」
「何か変わってませんね」
「それも全然」
「おいおい、変わってないのか」
先生と呼ばれたこの人はみんなの言葉に笑って返した。微笑みは若々しい。しかしそれでも何処か年齢を感じさせる深さがそこにはあった。
「結構歳取ったんだがな」
「杉岡先生は変わらないですよ」
「ええ、本当に」
「髪の毛の量も」
「それは喜ぶべきことか？」

その杉岡先生は髪の毛の話に対しては微妙な顔になった。
「髪の量が変わらないのは」
「なくなるよりましなんじゃ」
「ねえ」
「それよりは」
これがかつての生徒達の言葉だった。
「先生の歳になったら後は減るだけですし」
「俺なんかも結構きてるし」
「おいおい、そういえば張本御前の頭は」
先生はその張本と呼んだ彼の頭を見て言う。言いながら生徒達のところに来てだ。そうしてそのうえで彼に対してさらに言うのだった。
「また随分と変わったな」
「去年から急に減ったんですよ」
見れば頭の上の部分の髪がかなり少ない。一目でわかるまでにだ。
「もうね。本当に急に」
「人によっては急に来るからな」
先生は彼の言葉にしみじみと話した。話しながら生徒達の少し前に立ってそのうえで話している。何処となく教師のポジションである。
「髪の毛はな」
「実感しました」
張本はしみじみとした言葉で返した。
「俺はないって思ったんですけれど」
「誰でもそう思うんだよ」
先生の言葉もしみじみとしたものだった。
「若い時はな」
「そうなんですか」
「髪の毛は怖いぞ」
先生はまた言った。

「覚悟を決めるまでが大変だ」
「よくわかりましたよ、本当に」
「しかし。皆変わった奴は変わったよな」
「奈津美ちゃんなんか美人になったし」
「そう？」
奈津美と呼ばれた切れ長の目の美女がそれに返した。
「私は特には」
「いやいや、美人になったよ」
「そうよね」
「高校の時なんかショートで日焼けして男の子みたいだったのに」
今は色白でロングヘアにしている。唇も紅で鼻も高い。女優といっても通用する位の顔立ちである。それが今の彼女であるというのだ。
「それが全然ね」
「違うし」
「何処をどう変わったのって」
「まあ旦那のリクエストに応えてるけれど」
彼女は少し考える顔になってから述べた。

第三章

「実はね」
「って結婚してたの、あんた」
「そういえば左の薬指には」
「あるわよね」
「これね」
その指輪を皆にも見せる。銀色のリングである。それが確かな光を放っている。
「これのことね」
「そうよ、それよ」
「指輪。今気付いたけれど」
「そうだよな」
「三年になるのよね」
彼女は指輪を見ながらにこりと話すのだった。
「もうそれからね」
「結婚してかあ」
「まあ私も結婚して一年だけれど」
「私は来年ね」
女性陣がここでそれぞれ話す。そして男性陣もだった。
「俺も結構長いけれどな」
「俺やっと婚約できたよ」
「髪のあるうちに結婚できてよかったよ」
「だよな」
「結婚はした方がいいぞ」
先生もここで皆に言う。
「それはな」
「ですよね。離婚する奴もいますけれど」
「結婚はした方がいいですよね」

「そうそう」
「それに尽きるからな」
こんな話から何時の間にか昔話になる。学生時代の話だ。
それはそれぞれの思い出になった。その話になっていく。
「御前あの時思いきり寝てたよな」
「チョーク飛んで来るとは思わなかったよ」
実に古典的な話であった。
「頭にこつん、だったからな」
「そうそう、額に見事に当たったからな」
「見ているこっちも驚いたわよ」
「全く」
「当たった方はもっと驚いたよ」
彼はまた言った。
「何だ、って思って起きたらよ」
「先生も起きろ、って一言だったからな」
「物凄く重く低い声でな」
「あれも怖かったよな」
「ああ、あれはな」
こんな話もした。そうして先生が言ってきた。
「あの先生はそうなんだよ」
「外見滅茶苦茶怖いですよね」
「最初見た時この人何だって思いましたよ」
「うちの先生はそうした外見の人多いからな」
先生は今度はこう言った。
「特に柔道部はそうだけれどな」
「柔道部ですか）」
「あそこは確かに」
皆も柔道部という名前が出ると頷いた。
「全国クラスですしね」
「顧問の牟田野先生あれだし」

「ああ、強いからな」
先生もその牟田野先生という先生について言う。
「今も生活指導だ」
「じゃあ今も風紀はいいんですね」
「それだったら」
「いいぞ。相変わらずな」
先生は断言してみせた。
「元々うちの学校はそういうのはいいけれどな」
「そんなに悪くなる筈がありませんしね、うちは」
「確かに」
それは確かに話す。そして話は少し変わってきた。

第四章

「しかし、そんな話をしていたら」
「そうだよな。見たくなったよな」
「だよな」
男組が言い出してきたのだ。最初は彼等がであった。
「今から柔道場行くか」
「ああ、いいな」
「ここにばかりいても面白くないしな」
「だしな」
「そうだな。それはな」
先生も彼等の言葉に対して頷いた。
「じゃあ今からその柔道場に行くか」
「あっ、いいですかそれで」
「今からそこに言っていいんですか」
「だから教室にいてばかりでも面白くないだろう」
先生は彼等の問いに微笑みと共に返した。やはり教師らしい仕草であった。落ち着いていてそれでいて諭す、そうしたものだった。
「そうだな。では今からな」
「はい、じゃあ今から」
「行きましょう」
「どうしようかしら」
女組の一人がここで言った。
「私達は。柔道なんてしたことないし」
「別にいいんじゃない？一緒に行っても」
「そうよね」
彼女達の意見もそれに傾くのだった。
「柔道場なんて行ったことないし」
「今行くのもそれはそれでいいし」

「じゃあ」
「そうだな。皆で行こう」
先生はここで考えを固めた。
「今からな」
「わかりました。今から」
「行きましょうか」
皆席を立ってだ。そのうえで教室を出てその柔道場に向かう。その黒い木の廊下を進み教室が壁の中にある形で並んでいる廊下を進む。四角い校舎で右に曲がり左に曲がりだ。そうして校舎の外に出て和風の静かな佇まいの庭と建物の横を通った。そこは。
「ああ、茶室もそのままですね」
「これも」
「ああ、そのままだよ」
校舎の外の廊下を進みながら左手に見えるその茶室を見ながらだ。右手には白く小さい花が咲く花壇と小さな校舎がある。向こうにはグラウンドが見える。そこは砂色の見事なグラウンドだ。しかもそれは二つもある。
「この茶室もな」
「茶室がある学校っていうのもな」
「そうそうないし」
「普通はそうよね」
「うちはこういうのは凝る学校だからな」
先生は笑みを浮かべながら話した。
「だから茶室だってあるし」
「バンドだってできますし」
「本当に何でもある学校ですよね」
「大学には馬だっているしな」
この学校は上に大学がある。なお中等部や初等部もある。幼稚園までだ。
「とにかく何でもあるからな」

「馬に乗ってっていったら」
「ギンガマンか暴れん坊将軍か」
「ってギンガマンかよ」
「また古いわね」
皆何故かギンガマンで言い合う。
「せめて仮面ライダー響鬼の映画って言わないとな」
「そうそう」
「おい、皆随分と詳しいな」
先生もそんな彼等の話を聞いて笑いながら顔を向けてきた。先生が先頭でかつての生徒達が後ろだ。完全に昔の姿になっていた。外見以外は。
「先生も最近孫の為に観ているんだけれどな」
「こっちは子供に合わせてですよ」
「俺もですよ」
「私も」
彼等は笑ってこう話す。
「そっちの勉強も大変なんですよ」
「ウルトラマンは今はやってないですけれど」
「しかし何だかんで皆観るからな」
特撮ものはどうしてもそうなってしまう。年齢に関係なく楽しめる人間は楽しめる、それが特撮というものであるからだ。そうした魔力があるのだ。

第五章

「それでわかるんですよ」
「時代劇も」
「そうだよな。特撮とかアニメはな」
語る先生の顔は明るい。腕を組む仕草もだ。
「どうしても観るからな」
「今の仮面ライダーもいいですしね」
「あの世界観が」
「馬は出ないですけれど」
そんな話をしながら柔道場に向かう。そこは別の校舎を越えて体育館とテニスコートを越えてだ。そのうえでそこにやって来たのである。
その時の体育館やテニスコートを見てもだ。皆懐かしい顔になる。
「本当に変わらないよな」
「だよな」
「私もここでよくテニスの練習したわ」
女性陣の中でも一際小柄な女が言った。
「テニス部だったしね」
「そうそう、あんたテニス少女だったわよね」
「いつもラケット持ってたし」
「そうだったわよね」
「ええ、そうだったのよね」
小柄な彼女がにこりと笑って応える。
「今も時々してるけれど」
「ああ、今もしてるのテニス」
「ちゃんと」
「健康の為にね」
していると。にこりと笑って述べた。

「してるわよ」
「ふうん、頑張ってるのね」
「だから今もスタイルがいいの」
「多分ね」
「そうかあ、私も運動しようかな」
「そうよね」
女組がそんな話をするとだ。男組も乗ってきた。そうしてそれぞれこんなことを言うのであった。
「俺もなあ。最近腹が出てきたしな」
「そうだよな。太ったからな」
「ここんとこ急に太ってきたんだよな」
こんな話をするのだった。
「油断するとすぐ太るようになったんだけれどな」
「そうそう」
「髪の毛だってな」
「また随分と怖い話をするな」
先生はここでまた振り向いた。見ればその顔はいささか引きつっている。そのうえでの言葉だった。どうやらぐさりとくるものがあったらしい。
「全く」
「ですよね。けれど気になるんですよね」
「そうそう」
しかし彼等はまだ言う。こうした話は止まらないらしい。
「先生もそうじゃないですか？」
「結構」
「髪の毛のことは言うなよ」
これが先生の反論だった。
「絶対にな」
「わかりました。しかしここも」
「そうだよな。よく通ったよな」

「学校にいた時はな」
皆ここでも目を細めさせて話をした。そのテニスコートや体育館を見てからだ。そのうえで再びそんな話になるのであった。
「ここも懐かしいよな」
「そうだよな」
「そうね。ここもね」
「思い出の場所よね」
「あそこでジュース買って飲んだわね」
「そうそう」
ジュースの自動販売機もあった。それも見ながら話すのだった。
「高校でジュース買えるっていうのも凄いよね」
「それが有り難かったね」
「ええ」
そんな話をしながら遂にその道場に辿り着いた。道場の門は質素なものである。だが質素でありながら頑健な造りの門であった。

第六章

「おいおい、ここもな」
「全然変わらないな」
「びっくりする位にな」
男組がその門を見て言う。道場の中には畳が見える。その畳がそこが柔道場であることを教えていた。茶色の木の壁も見える。
「先生はいないか」
「部活の練習時間じゃなかったかな」
「みたいだな」
こう話してそのうえで道場の中を見る。その中を見ても言う。
「ここで授業やったよな」
「だよな。夏は暑くて汗だくになってな」
「冬なんかもう埃が気になってな」
「結構辛かったよな」
こんな話にもなる。
「ここで三年やったな」
「そうそう、他にも大学の構内にも柔道場があるからな」
「そこも使ってな」
「柔道場二つあるからな、うちの学校」
今度はこのことが話された。
「それも有り難いよな」
「有り難いっていうかそんな学校滅多にないよな」
「いや、普通は一つあったら立派だろ」
「そうか」
そんな話をしながら見ていた。そして暫く見ていると先生が言ってきた。
「先生もここで授業受けたな」
「ああ、そういえば先生もうちの学校出身でしたっけ」

「そうでしたね」
「ああ、そうだよ」
語るその言葉も目も温かいものにないものになっていた。そのうえでの言葉だった。それを話しながらだ。その柔道場の中を見ていた。
「先生がここの生徒だった時からこの柔道場はあったんだよな」
「そう思うと古いですね」
「三十年ですか？」
「それ位かな。やっぱり古いよな」
そしてこうも言うのだった。
「ただ。さっきの新校舎はな」
「その時はなかったんdねすか？」
「そうだったんですか？」
「入学の時にできたんだよ」
そうだったと話すのだった。
「その時はぴかぴかだったんだけれどな。今じゃな」
「まあ使っていたら古くなりますからね」
「けれど本校舎なんて」
彼等が最初にいた瓦の校舎である。そこのことだ。
「もう百年は経ってるんじゃ」
「戦争前からあるんですよね、確か」
「あそこは」
「そうかな。それ位になるかな」
先生は腕を組み考える顔になって述べた。一行は柔道場から離れてそのうえでその新校舎の方に戻った。今度は新校舎の中に入っていた。
ボードの壁紙を見る。そこには高校のポスターもある。皆はそれも見てだ。
「ここで貼るのも同じか」
「だよな、同じだよな」

「そうよね」
皆それを見てまた話す。
「タイムスリップしたような気になってきたよ」
「けれどポスターはな」
しかしポスターにある月日は今である。タイムスリップしていないのはそれでわかる。それは見ればすぐにわかることであった。
「今だしな」
「だから違うんだよな」
「ちゃんと月日は経ってるのね」
そのことを認識するのだった。
「そうか、あの時じゃないんだな」
「そうよね」
このことをあらためて認識することになった。
「全然違うか」
「だよな」
「まあ月日は経ってるな」
先生もそれは言う。

第七章

「けれどな」
「けれど？」
「どうしたんですか先生」
「まずはグラウンドに行かないか」
生徒達の問いに答える前にこんなことを言ってみせたのだった。
「グラウンドにだ。どうだ？」
「グラウンドにですか、今度は」
「今からですか」
「そうだ、今だ」
温かい目に戻ってそのうえでの言葉であった。
「今からだ。どうだ？」
「そうですね、いいですね」
「グラウンドも見てみたくなってきていましたし」
「丁度いいですね」
こう話してだ。そのグラウンドに向かうことになった。新校舎を出てそのうえで花壇のところにある階段を下りてグラウンドの前に出る。そこには巨大なグラウンドが二つ並んでいた。
それぞれのグラウンドの端と端にはラグビーのポールがある。そしてその前は本校舎だ。グラウンドから見て左手にも校舎がありその一階は食堂だった。本校舎とその校舎の間には立派な図書館もある。実に広い学校であることがここでもわかった。
「いや、何度見ても滅茶苦茶広いグラウンドだよな」
「全く」
皆そのグラウンドを見ても話す。
「ここはなあ」
「学校自体広いけれどな」
「特に広いわよね」

「ああ、しかも二つあるからな」
「考えたら凄い学校よね」
「場所があったからな」
先生もしみじみとした口調で話す。
「それでなんだけれどな」
「いや、それでもここはかなり」
「私の中学校なんかとはもう全然」
「海みたいだよな」
「いいグランドだし」
「そうだな。色々なことに使えるいいグラウンドだ」
先生がまた話した。
「ここはな」
「それに校庭だけじゃないしね」
「あの図書館だって」
「中にある本よく読んだなあ」
「テスト前にはあそこで勉強したし」
皆今度は図書館を見た。そこの思い出にも浸るのだった。
「私その時の彼氏とずっと一緒だったし」
「ってあんたの場合は今の旦那さんでもあるでしょ」
「そうよ」
このことはすぐに突っ込まれた。高校の時からの付き合いがそのまま夫婦の絆になったのである。深く長い絆というわけである。
「けれど。本当にね」
「深い付き合いよね」
「図書館で一緒に勉強ってのはいいわよね」
女組はそのことについて話した。
「俺もあそこでな」
「ああ、御前昼はいつもあそこにいたよな」
「放課後も」
「蔵書多いからなんだよ」

そうだと話すのは少し太った者だった。
「幾ら読んでも読み足りない位にあるしな」
「まあ確かに多いよな」
「あそこの本もな」
「新聞もあったしな」
「あっ、そういえば御前」
今度はオールバックの彼に注目する一同だった。

第八章

「阪神優勝しそうな時にスポーツ新聞持って来たよな」
「ああ、そういえばそうだったな」
その彼も周りの言葉に頷いて返す。
「あの時はな。阪神優勝しそうだったからな」
「あの時は残念だったけれどな」
「ヤクルト優勝したからな」
「本当にな」
「うちの学校阪神ファンばかりだからな」
先生のこの言葉は現在形だった。
「皆優勝しそうになったら騒ぐからな」
「あの時も駄目だったし」
「この前なんてな。十三ゲームも開いていて」
「あっさりと」
一同の口が尖っていく。口調も忌々しげなものに変わっていく。
「それで巨人にあっさりと」
「あれ何よ」
「全く」
「それでも。あの時はな」
オールバックの彼の目はその中でも温かいものだった。それは言葉にもそのままかかっておりその声で話していくのであった。
「いい思い出だよ」
「まあそうね」
「優勝する優勝するって皆で言って」
「結局しなかったけれど」
周りの皆もこう話していくのだった。
「今にして思えばな」
「いい思い出よ」

「本当にな」
「さて、それじゃあ今は」
ここでまた先生が皆に対して言ってきた。
「戻るか」
「戻るんですか」
「今は」
「教室にな。それからは」
話はそれで終わりではなかった。まだあるのだった。
「行くか」
「何処にですか？」
「それで今度は」
「皆大人になったんだ。何処か飲みに行かないか？」
こう誘ったのである。かつて生徒だった彼等をだ。
「皆でな」
「あっ、いいですね」
「じゃあ駅前の居酒屋でも」
皆もそれに乗る。そうしてであった。
先生はまた皆にだ。また言ってきた。
「ただな」
「ただ？」
「何かあるんですか？」
「ワリカンだぞ。皆に奢るとかは無理だからな」
「あはは、それはいいですよ」
「そんなことは言いませんから」
皆も笑ってこう返した。彼等もそれはわかっていた。
「先生にも辛いですよね」
「お金が」
「辛いよ、本当にね」
その通りだと答える先生だった。
「学校の先生の給料なんてたかが知れてるからね」

「ええ、じゃあワリカンで」
「そういうことで」
「行こうか」
また皆を誘う先生だった。
「教室に戻ってからな」
「はい、じゃあ」
「そうしましょう」
皆も先生の言葉に笑顔で頷いてそのうえで一旦校舎に戻る。そしてまた思い出の場所に戻るのだった。彼等全員の思い出の場所にだ。

懐かしい校舎　　完

２０１０・４・１２

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5418n/

懐かしい校舎

2010年10月8日14時27分発行